

B-2

トルコ語における補文節内の示差的主語標示¹

鈴木唯 (東京大学大学院・博士課程)

suzuki.yui.s.y@gmail.com

【要旨】 示差的主語標示 (Differential Subject Marking; DSM) は主語名詞句の特性によってその主語の格標示が交替する現象である。トルコ語では補文節内でのみ DSM が見られ、補文節の主語が属格と無標で交替する。本稿では、コーパスに基づく量的調査を行うことで、補文節の主語の有生性、定標識の種類、複数標識の有無、補文節の動詞の種類という条件によってトルコ語の補文節内の主語の主語/無標の頻度が異なるのかを調べる。調査の結果、次のことを明らかにする: 補文節の主語が無性の場合、主語に複数標識がついていない場合、不定標識のついている場合、補文節の動詞が逆使役・受け身動詞と非意思動詞である場合に補文節の主語が無標になる頻度が高かった。特に、動詞の中でも *ol* ‘be’ と *gerek* ‘be necessary’ の場合に主語が無標である頻度が高かった。これらの結果に基づき、動詞の種類による主語の標示の頻度の違いには分裂自動詞性の特徴がみられることを議論する。さらに、主語の特質よりも補文節の動詞の語彙的条件が DSM の頻度の違いに大きく関わっていることを主張する。

1. はじめに

【背景】 示差的項標示は名詞句の特性によってその名詞句項の格標示が交替する現象である。示差的項標示の研究ではどのような要因で交替が起こるのかが注目され、通言語的に有生性や定性、人称の卓立性といった特性が示差的項標示を引き起こす要因であると指摘されている (Comrie 1989, Aissen 2003, Haspelmath 2021)。示差的項標示のうち、主語の格標示が交替する現象を示差的主語標示 (Differential Subject Marking; DSM) という。

【現象】 トルコ語では動詞接辞-*DIK* または-*mA*²によって形成される補文節内においてのみ DSM が見られる。具体的には、主語が属格で表される場合と無標の場合という交替である (Göksel & Kerslake 2005, Heusinger & Kornfilt 2005, Kerslake 2020)。本研究は (1) の例に示すような動詞接辞-*DIK* によって形成される補文節内にみられる DSM を調査・分析する。

(1) [*Köy-ü haydut(-un) bas-tığ-m]-ı duy-du-m.* (Heusinger & Kornfilt 2005: 15)
village-ACC robber(-GEN) raid-NMLZ-3SG-ACC hear-PST-1SG
「強盗が村を襲ったと聞いた。」

重要なことに、すべての場合に主語の交替が起こるわけではない。第一に、主語の格標示の交替が起きるのは主語が普通名詞の場合に限る。主語が代名詞または固有名詞の場合、主語に必ず属格がつく。(2) では主語が代名詞であり、主語に属格がつく必要がある。

(2) [*Çocuk-lar-ımız için doğru ol-an-ı biz*(-im) bil-diğ-imiz]-i düşün-erek...*
Child-PL-2PL for right be-NMLZ-ACC 2PL-GEN know-NMLZ-2PL-ACC think-CVB
「子供たちのために正しいことを私たちが知っていると考えて...」

¹ 本稿の作成にあたって、長屋尚典、石川さくら、左近優太、周杜海、谷川みずき、林真衣、諸隈夕子、吉田樹生、Yayhoğlu Ogan の各氏から有益なコメントをいただいた。各氏に深く感謝を述べたい。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも発表者の責任である。また、本研究は JSPS 科研費 21J21799 の助成を受けたものである。

² トルコ語では接辞が母音調和や子音交替による異形態をもつ。その場合、その交替する音は大文字で表記している。

第二に、主語の格標示の交替が起きるのは主語が動詞の直前にある場合に限る。主語が動詞の直前以外にある場合、主語に必ず属格がつく。(3) では (1) の補文節内の主語が動詞直前以外に現れており、主語に属格がつく必要がある。

- (3) [*Haydut*(-un)* *köy-ü* *bas-tığ-in/-ı* *duy-du-m.*
robber(-GEN) village-ACC raid-NMLZ-3SG-ACC hear-PST-1SG
「強盗が村を襲ったと聞いた。」

このようなことから、動詞接辞-DIK によって形成される補文節内の主語が普通名詞であり、かつ動詞直前に現れる場合が調査対象となる。

【先行研究】 トルコ語の参照文法や記述研究では主語が属格の場合は特定の解釈、主語が無標な場合は不特定の解釈をもつ傾向があると指摘されている (Göksel & Kerslake 2005: 430, Heusinger & Kornfilt 2005)。

【問題】 しかし、主語の属格/無標によって特定性に関する解釈に傾向があるのみで、どのような条件によってトルコ語の補文節内の主語の格標示の頻度が異なるのかは明らかではない。実際の言語使用におけるこれらの要素の DSM への影響を経験的・量的なデータと共に示した先行研究は十分でない。これまでは作例に基づく先行研究が多い。Kerslake (2020) は後期オスマン時代のトルコ語と比較しつつ部分的に現代トルコ語の補文節についてコーパス調査に基づく量的調査を行っているものの、より量を増やした全体的な調査が必要である。

ある言語に示差的な主語標示がある場合、典型的でない主語に標示がつくとされている (Haspelmath 2021)。この点を踏まえると、不特定の主語という非典型的な場合に主語が無標になるトルコ語の DSM はこの予測に反している。その点でもトルコ語の DSM を調査することは重要である。

【主張】 そこで本稿は、コーパスに基づく量的調査を行うことで (第 2 節)、トルコ語の先行研究で DSM に影響している可能性があるとし唆されている主語の有生性、定性、複数標識の有無、動詞の種類という条件によってトルコ語の補文節内の主語の格標示の頻度が異なるのかを調べる: トルコ語において補文節内主語が無性の場合、主語に複数標識がついていない場合、不定標識のついている場合、補文節の動詞が逆使役・受け身動詞、非意思動詞である場合に補文節主語が無標になる頻度が高かった。特に、これらの動詞の中でも *ol 'be'* と *gerek 'be necessary'* の場合に主語が無標である頻度が高かった (第 3 節)。これらの結果に基づき、動詞の種類による主語の標示の頻度の違いには分裂自動詞性の特徴がみられることを議論する。さらに、主語の特質よりも補文節の動詞の語彙的条件が DSM の頻度の違いに大きく関わっていることを主張する (第 4 節)。

2. 調査方法

【コーパス調査】 オンラインニュース記事からなるコーパスデータ (Leipzig Corpora Collection 2019) から 3,541 件の-DIK 補文節を抜き出した。このコーパスは 2014 年にニュースやウェブテキストなど様々なソースから集められたものである。3 万件の例文を含む *tur_mixed_2014_30K* というファイルを使用した。

【調査対象】 本研究は補文節内の主語が普通名詞であり、かつ動詞直前に現れる場合が調査対象となる。まず、(4) のように主語の省略された例文と (5) のように非人称受け身構文、つまり主語がそもそもない例文を手作業で除いた。さらに、主語が代名詞である例文と固有名詞である例文を除いた。最後に、主語が動詞直前以外に出ている例を除いた。結果、726 件が調査対象として残った。

(4)	<i>Başkan</i>	<i>Kılıç,</i>	[\emptyset	<i>karar-ı</i>	<i>açıkla-dık-tan</i>	<i>sonra</i>
	president	Kılıç		decision-ACC	announce-NMLZ-ABL	after
	<i>rahatla-dık-lar-ın]-ı</i>		<i>da</i>	<i>söyle-di.</i>		
	relieve-NMLZ-PL-3SG-ACC		PARTICLE	say-PST		

「クルチ大統領はまた、決定を発表した後、彼らは安堵したと述べた。」

(5)	<i>[Bu konu-ya vicdanı</i>	<i>ve</i>	<i>ciddi</i>	<i>olarak</i>	<i>yaklaş-ıl-ma-dığ]-ı</i>	<i>konusunda...</i>
	this topic-DATconscientiously	and	seriously as	approach-PASS-NEG-NMLZ-3SG	about	

「この問題に良心的かつ真剣に取り組んでいないということについて...」

【変数項目】 第1節で示した項目の DSM への影響を調べるために、コーパス調査によって収集した例文 726 件に対して、次に示す [1] から [5] の項目でアノテーションをした。

[1] 主語の標識 <属格/無標>: (1) で示したように、主語に属格-(n)In がつくか無標なのか。

[2] 有生性 <人間/非人間>: 有生性が約 150 年前のオスマントルコ語における DSM の大きな要因となっていることが指摘されている (Kerslake 2020)。具体的には、主語が人間の場合に主語に属格がつく傾向があることが示されている。現代トルコ語においても有生性によって主語の標識の傾向が異なるかもしれない。人間には人間のグループ (e.g., 政府、委員会) や神も含む。

[3] 複数標識の有無 <あり/なし>: 複数標識の有無によって主語の標識の傾向が異なるかもしれない。形式的に複数標識-*lar* がついているかどうかをみる。

[4] 定性標識の種類 <定標識/不定標識/定性標識なし>: 特定性に大きく関わる概念として定性がある。補文節内の主語が不定名詞句の場合に主語が無標になることがあることが指摘されている (Göksel & Kerslake 2005: 431, Kerslake 2020: 124)。定性標識は定冠詞 (*bu* 「この」、*şu* 「その」、*o* 「あの」) や不変数量詞 (e.g., *her* ‘every’) など。不定標識は不定冠詞 *bir* や不定数量詞 (*birkaç* 「少しの」、*birtakım* 「いくつかの」) など。定性標識なしは上述の定性標識や不定標識がないもの。

[5] 動詞の種類 <逆使役・受け身動詞/非意思動詞/意思動詞/他動詞>: トルコ語の DSM の要因には動詞の種類があることも報告されている (Kerslake 2020)。具体的には、Kerslake (2020: 125) は主語が無標になるのは補文節の動詞が自動詞文や受け身文に限られると指摘している。一方で、(1) のような補文節の動詞が他動詞で無標主語の例も報告されている。調査では次の基準で動詞を形態統語的特徴によって区別する。

- 逆使役と受け身は自動詞のうち、動詞に動詞接辞-*IL* がついた動詞であり、トルコ語では逆使役動詞と受け身動詞を形式上区別できないので同じ扱いをする (e.g., *açıl* ‘be open, be opened’)
- 非意思動詞は自動詞のうち、非人称受け身にできない動詞である (e.g., *bat* ‘sink’)
- 意思動詞は自動詞のうち、非人称受け身にできる動詞である (e.g., *koş* ‘run’)
- 他動詞は目的語をとる動詞であり、二つの目的語をとる複他動詞も他動詞として数えている (e.g., *öldür* ‘kill’, *ver* ‘give’)

3. 調査結果

[1] 主語の標識: 調査対象である補文節の例 726 件のうち、主語に属格がある例は 265 件、主語が無標の例は 461 件だった。

[2] 主語の有生性: 主語が人間の場合と比べ、非人間の場合に無標主語の頻度が非常に高かった (表 1、図 1)。

具体的には主語が人間の場合は無標主語の例が 14.9% (74 例中 11 例) であった一方で、主語が非人間の場合は無標主語の例が 69.0% (652 例中 450 例) であった。(6) は主語が人間で属格、(7) は主語が非人間で無標の例である。

表 1: 有生性と主語の標識

	属格	無標	合計
人間	63 (85.1%)	11 (14.9%)	74 (100.0%)
非人間	202 (31.0%)	450 (69.0%)	652 (100.0%)

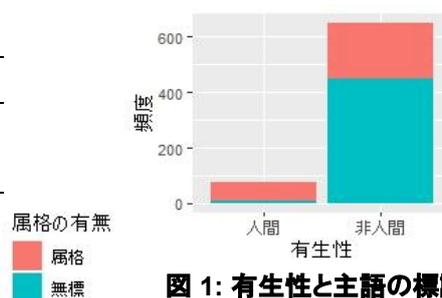


図 1: 有生性と主語の標識

- (6) [*Aynı hata-lar-ı binlerce kişi-nin yap-tuğ-un]-ı*
 same mistake-PL-ACC thousands person-GEN do-NMLZ-3SG-ACC
hep-imiz bil-iyor-uz.
 all-2PL know-PRS-2PL

「同じ間違いを何千人もの人がしていることを私たちはみな知っている。」

- (7) [*...yüz-de 98'-in-de domuz eti kullan-ıl-dığ-ın]-ı tesbit et-miş!*
 hundred-LOC 98-POSS-LOC pork use-PASS-NMLZ-3SG-ACC fixation do-PRF

「...98%で豚肉が使われていることを検出したらしい！」

[3] 主語の複数標識の有無: 主語に複数標識がある場合と比べ、複数標識がない場合に無標主語の頻度が高かった(表 2、図 2)。具体的には主語に複数標識がある場合は無標主語の例が 38.8% (134 例中 52 例) であった一方で、主語に複数標識がない場合は無標主語の例が 69.1% (592 例中 409 例) であった。(8) は主語に複数標識があり、主語が属格、(9) は主語に複数標識がなく、主語が無標の例である。

表 2: 複数標識の有無と主語の標識

	属格	無標	合計
あり	82 (61.2%)	52 (38.8%)	134 (100.0%)
なし	183 (30.9%)	409 (69.1%)	592 (100.0%)

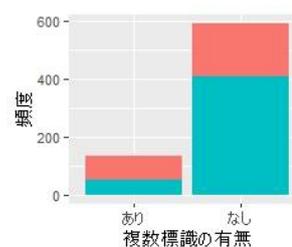


図 2: 複数標識の有無と主語の標識

- (8) [*daha 1 yıl geç-medem yine aynı sorun-lar-ın yaşan-dığ-ın]-a*
 more 1 year pass-NEG.NMLZ again same problem-PL-GEN occur-NMLZ-3SG-DAT
değ-in-en çevre sakinleri,...
 mention-NMLZ environment habitant-PL

「1 年も過ぎずにまた同じ問題が起きたことに言及する近隣住民は、...」

- (9) [*...henüz mutabakat sağla-n-ama-dığ-ın]-ı söyle-di.*
 still consensus provide-PASS-POSS.NEG-NMLZ-3SG-ACC say-PST

「...まだ合意がなかったと言った。」

[4] **定性標識の種類:** 主語の名詞句内に定標識がある場合に比べ、不定冠詞がある場合と冠詞がない場合に無標主語の頻度が高かった (表 3、図 3)。具体的には主語に定標識がある場合は無標主語の例が 40.7% (11 例中 27 例) であった一方で、主語に不定標識がある場合は無標主語の例が 72.8% (92 例中 67 例)、定性標識がない場合は 63.1% (607 例中 383 例) であった。主語に定標識があり無標主語の例は全て、(10) のように *ol*, *bulun* という動詞で存在を表す文と *gerek* ‘be necessary’ の文であった。(11) は主語の名詞句内に不定冠詞があり、主語が無標の例である。

表 3: 定性標識と主語の標識

	属格	無標	合計
定標識	16 (59.3%)	11 (40.7%)	27 (100.0%)
不定標識	25 (27.2%)	67 (72.8%)	92 (100.0%)
標識なし	224 (36.9%)	383 (63.1%)	607 (100.0%)

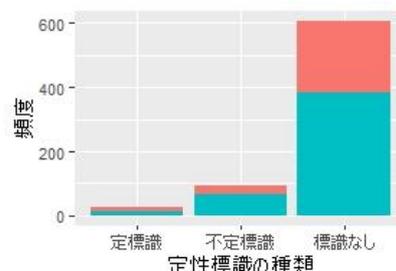


図 3: 複数標識の有無と主語の標識

(10) [*Kazakistan ve Avusturya maç-lar-in-da kondisyon eksiklig-imiz*]
 kazakhstan and Austria match-PL-3SG-LOC condition deficiency-2PL
ol-duğ-un-u düşün-mü-yor-um.
 be-NMLZ-POSS-ACC think-NEG-PRS-1SG

「カザフスタン・オーストリア戦で私たちのコンディションの不足があったとは思わない。」

(11) [*...otobüs-ler-le ilgili bir çalışma yap-ıl-ma-dığ-in]-ı yaz-mış...*
 bus-PL-COM related INDF research do-PASS-NEG-NMLZ-ACC write-PRF

「...バスに関する研究は行われていないことを書いたらしい...」

[5] **動詞の種類:** 補文節の動詞が他の種類の動詞と比べ逆使役・受け身動詞と非意思動詞の場合に無標主語の頻度が高かった (表 4、図 4)。具体的には、逆使役・受け身動詞の場合に無標主語の例は 55.3% (253 例中 140 例) であった。非意思動詞の場合に 78.3% (405 例中 317 例) であった。(12) は逆使役・受け身動詞の例、(13) は非意思動詞の例である。重要なことに、主語が無標の場合の非意思動詞は、*ol* ‘be’ (142 例)、*gerek* ‘be necessary’ (166 例) の 2 つの動詞が多くを占めている。(14) は補文節の動詞が *ol* ‘be’、(15) は *gerek* ‘be necessary’ の例である。補文節の動詞が他動詞の場合で主語が無標の例は見つからなかった。

表 4: 動詞の種類と主語の標識

動詞の種類	属格	無標	合計
逆使役・受け身動詞	113 (44.7%)	140 (55.3%)	253 (100.0%)
非意思動詞	88 (21.7%)	317 (78.3%)	405 (100.0%)
意思動詞	27 (87.1%)	4 (12.9%)	31 (100.0%)
他動詞	37 (100.0%)	0 (0.0%)	37 (100.0%)

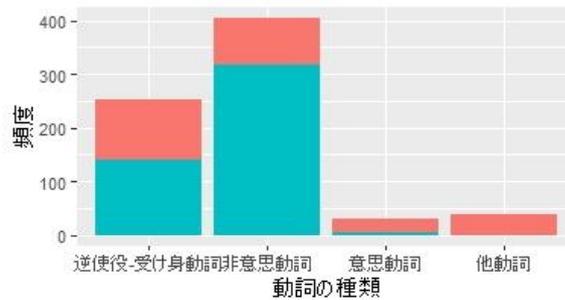


図 4: 動詞の種類と主語の標識

- (12) [*halk tepki göstere-me-diğ-i için önlem-ler al-ın-ama-diğ-i*] ve...
 folk reaction show-NG-NMLZ-POSS for precaution-PL take-PASS-NMLZ-POSS and...
 「国民は反応を示さなかったので対策が取られなかったことと...」
- (13) [*15-20 kilogram arasında yağış düş-tüğ-ün]-ü ifade et-ti.*
 15-20 kilogram between precipitation fall-NMLZ-POSS-ACC express-PST
 「15～20 キログラムの降水量が落ちたと述べた。」
- (14) [*İnsan-lar Türkiye'-de böyle bir sorun ol-duğ-un]-u öğren-di-ler.*
 human-PL Turkey-LOC like.this one problem exist-NMLZ-POSS-ACC learn-PST-PL
 「人々はトルコでこのような問題があることを知った。」
- (15) [*...Türkiye'-ye daha çok destek ver-me-si gerek-tiğ-in]-i söyle-di-m.*
 Turkey-DAT more many support give-VN-POSS be.necessary-NMLZ-POSS-ACC say-PST-1SG
 「...トルコにさらに多くの支援をする必要があると言った。」

まとめるとトルコ語の補文節内主語の標識が無標になる頻度が高いのは次の場合である:

- 主語が非人間の場合
- 主語に複数標識がない場合
- 主語に主語に不定標識がない場合と定性標識がない場合
- 動詞が逆使役・受け身、非意思動詞の場合

4. 議論

本節では、第 3 節の結果に基づき、トルコ語の DSM について議論する。まず、動詞の種類による主語の標識の頻度の違いには分裂自動詞性の特徴がみられることを議論する (第 4.1 節)。さらに、主語の特質よりも補文節の動詞の語彙的条件が DSM の頻度の違いに大きく関わっていることを主張する (第 4.2 節)。

4.1. 動詞の種類による主語の標識の頻度の違いには分裂自動詞性の特徴がみられる

逆使役・受け身動詞、非意思動詞の場合に無標主語の頻度が高く、意思動詞と他動詞の場合に無標主語の頻度が低かった。動詞の種類による主語の標識の頻度の違いには分裂自動詞性の特徴がみられる。トルコ語では、非人称受け身構文ができるかどうかで自動詞が分類できる。逆使役・受け身動詞と非意思動詞は非人称受け身構文ができない動詞でいわゆる非対格動詞である。意思動詞は非人称受け身構文ができる動詞でいわゆる非能格動詞である (Nakipoğlu 2001)。この自動詞の分裂が補文節の主語の属格/無標の頻度にも見られ

た。つまり、調査において逆使役・受け身動詞、非意思動詞とアノテーションした非対格動詞の場合に無標主語の頻度が高く、意思動詞とアノテーションした非能格動詞と他動詞の場合に無標主語の頻度が低かった。

4.2. 主語の特質よりも補文節の動詞の語彙的条件が DSM の頻度の違いに大きく関わっている

これまでの DSM の類型論では、DSM の要因として主語の特性が注目されてきた (Comrie 1989, Aissen 2003, Dalrymple & Irina 2011)。トルコ語でも主語の有生性、複数標識の有無、定性標識の種類によって主語の標示の頻度が異なることが確認された。一方で、補文節の動詞の種類、さらには語彙的条件も DSM の頻度の違いに大きく関わっていた。無標主語の 461 例のうち、*ol* ‘be’ (142 例) が *gerek* ‘be necessary’ (166 例) であったことは、主語の特性のみを DSM の要因とする考えからは予測できない。むしろ、主語が非人間である場合や不定標識がある場合に無標主語の頻度が高かったのは、このような語彙の場合に主語が非人間であったり不定標識があったりする頻度が高いという理由かもしれない。

近年の DSM の研究では、主語の特質だけでなく、動詞の性質にも注目した研究がある。例えば、Verbeke & De Cuypere (2015) はネパール語の DSM の起こる要因の一つとして動詞の時制があることを指摘している。トルコ語も動詞の性質が DSM に影響している言語の一つであると言える。

5. 結論

本研究ではコーパス調査を行い、トルコ語の DSM の特定性以外の要因を経験的なデータと共に提示した: 補文節内主語が無性の場合、主語に複数標識がついていない場合、不定標識のついている場合、非動作主である場合に補文節主語が無標になる頻度が高い。先行研究では (1) のような他動詞の例文が挙げられていることが多いものの、このような他動詞で無標主語の例文は今回の調査では見つからなかった。このことから他動詞補文節の無標主語は非常にまれであることが経験的なデータをもとに示すことができた。

参考文献

- Aissen, Judith. 2003. Differential object marking: iconicity vs. economy. *Natural Language and Linguistic Theory* 21(3). 435–483./Comrie, Bernard. 1989. *Language universals and linguistic typology*. 2nd edn. Chicago, IL: University of Chicago Press./Dalrymple, Mary & Nikolaeva Irina. 2011. *Objects and information structure*. Cambridge: Cambridge University Press./Göksel, Aslı & Celia Kerlake. 2005. *Turkish: A comprehensive grammar*. London & New York: Routledge./Haspelmath, Martin. 2021. Role-reference associations and the explanation of argument coding splits. *Linguistics* 59(1). 123–174./Heusinger, Klaus von & Jaklin Kornfilt. 2005. The case of the direct object in Turkish: Semantics, syntax and morphology. *Turkic Languages* 9. 3–44./Kerlake, Celia. 2020. Subject marking of -DIK/-(y)AcAK complement clauses in written Turkish of the late Ottoman period (1860–1914). In Aslı Göksel, Dilek Uygun-Gökmen & Balkız Öztürk (eds.), *Morphological complexity within and across boundaries* (Studies in Language Companion Series 215), 121–154. Amsterdam: John Benjamins./Nakipoğlu, Mine. 2001. The referential properties of the implicit arguments of impersonal passive constructions. In Eser Erguvanlı Taylan (ed.), *The verb in Turkish*, 129–150. Amsterdam: John Benjamins./Verbeke, Saartje & Ludovic De Cuypere. 2015. Differential Subject Marking in Nepali imperfective constructions: A probabilistic grammar approach. *Studies in Language* 39(1). 1–23.